幻の物語

知秋一葉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
幻の物語

【Ｎコード】
Ｎ８４２８Ｂ

【作者名】
知秋一葉

【あらすじ】
第一話はただの夢でしょうか?！林さんは恋人か?妹か?

理不尽

「理不尽」

鳴った電話に風さんの目をやった。
「うーーん、またあの夢かぃ～
謎の夢だった！
なんでだろう！？
自分の手であの謎の夢が解けるかなぁ？
あの夢は、
師父と出会ってからよく見るんだ。
そう考えれば、
たぶん師父しか解けないだろう？！
うん、間違えない
師父と会いたい！
会いたい！！」
と、つぶやいた。

電話はまた鳴った。
「風、お見合い写真を見て欲しいの！いい子だよ」
母ちゃんからの電話だった。
「優しいし、料理も上手だし」
「はい、はい。了解しました。時間があればね」
風さんは返事をしながら朝ごはんを食べた。
パンとミルク。
しかたがない。
一人暮らしからだ。
自転車に乗って８時１５分前に会社に着いた。

健康のために、
彼はいつも自転車で通勤する。
風は旅行代理店の企画室の責任者だった。

入り口で、
「私、だーれだ？！」
と、後ろから目を隠された。
声だけ聞ければ見なくても、
後ろのやつはわかる。
「馬鹿もの！！」
風は笑って答えると、
「馬鹿ものからの“お礼”だよ」
と、後ろのやつが言い返した。
勿論、言葉だけではなく、
行動も加えた。
背中にパンチをくらわした。
「あ～、いたーい！お前、殺す気か？！」
後ろのやつは、
「朝から何も食べてないよ、力は全然出ない！」
と、笑った。
風は
「馬鹿！」
と、口からすべた。
当然、馬鹿ものからの“お礼”はもう一回あった。
しかし、
今回は耳が軽くねじられたものだった。
後ろの馬鹿ものは林嬌だ。
添乗員の中に一番活発な子だ。
一週間前に海外添乗に行った。

「いつ帰ってきた？」
と、風は聞くと
林嬌は風の前に回って、
「昨日の夜。これ」
と、ものを風に渡した。
「何これ？」
「お土産！」
「食べ物？」
「違います！ミャー人形です」
「ありがとう！いただくね」
「それだけ？！」
「また何か？」
「もっと喜んでくれると思ったのに」
「例えば？」
「自分で考えなさいよ」
「心から感謝しております！」
「まだまだ」
「じゃあ、どうしたらいい？」
「あのね…」
林嬌は怪しい目をしている。
それを見て、風は慌てて
「変な要求はよせよ！」
と、いい足す。
しかし、
彼女は無視して一方的に
「綺麗な夜景が見えるレストランで…」
と、言った。
「無理！無理！無理！」

「どうして？」
「時間もないし、金もないし」
証明のために財布も見せたけど、
「明日は金曜日だし、給料日だし」
林嬌は風に考える余裕を与えない。
「そうだけど…」
「じゃあ、明日しましょう！」
風の手をとって指切りをした。
「約束したよ！ヒーヒーヒ」
林嬌はいたずら顔をして走って行った。

風は彼女の背中に向かって、
「おい！おい！ちょっと待ってよ！」
「理不尽なやつ！」
と、独り言。
「恋愛中の子は、皆そうだよ！」
李琴（林嬌の上司、添乗員の責任者）は風に声をかけた。
風は彼女に
「お早う！」
と、挨拶してから
「ちなみに、恋愛中？誰の話？？？」
と聞いた。
「林ちゃんとあーなーた！」
「僕たち？！冗談言うなよ」
「誰かいつもあの子のことを見守っているだ？！」
「間違えているんじゃない！」
風の顔は赤くなった
「僕はずっと彼女を妹と思っているんだ」
と、必死に弁解した。
「弁解しなくてもいいの。あー！それは何？？」

李琴はミャー人形を指した。
「お土産。彼女から」
「名前は?!」
「名前ね~、そう、ミャー人形だけど、それは何か」
「じゃあ、調べて。ミャー人形のことを」
「何か意味がある?」
「うん!らしいよ」
「じゃ、教えてよ」
「教えない!でも、一つを教えるわ」
「何?」
「林ちゃんは理不尽じゃないよ」
「じゃあ、何あれ?勝手に…」
「甘えんぼよ」
「でも…」
「甘えちゃう、イコール可愛いよ!覚えなさい」
風は小さい声で
「覚える必要があるかよ!」
と、つぶやく。
その代価は、
「文句をいわないで頂戴」
「あー、もう一つを教えるわよ。私にもあんなときがあったんだよ!!」
「ミャー人形のことをちゃんと調べて」
と、李琴の連発の砲火を浴びることになった。
李琴は早口女で、
３０過ぎの勝ち犬だった。
二人は話しながら会社に入った。
其の時
企画室の電話が鳴った?!

定食

社長からの電話だった。
彼はただいま業界交流会の出席中だ。
「風！君のアジアの旅シリーズ好評だぜ！
　我社は絶対に今年の天馬賞をとるぞ！」
激情を抑えきれない声だった。
それから二週間後、
遂にホットな新企画が仕上がった。
タイトルは『アジアの旅シリーズ第三弾～家族の絆』、
企画室の全員が力を合わせて、１ヶ月かけて作り上げた力作だ。
「ランチに行かない？」
その日の昼休み、
風は李琴に誘われて、会社を出た。
近所の人気の店は二人が席をとって間もなく満席になった。

小さい店なので、
カウンターに座ると、
時々キッチン内の話が聞こえた。
「馬鹿野郎！」
「すみません」
「しっかりやれよ！」
「はい。すみません」
「忙しいから、取り合えず、外に出てしっかりやれ」
「はい。すみません」
叱れたホールさんはキッチンを出て走って回り始めた。
涙ぐみながら微笑んでいる。

風は感嘆しながら、回鍋肉定食を注文した。
「男はつらいけど、女もつらいね！」
李琴は〝本日のお勧めランチ〟の肉団子定食を注文しながら、
「風、やっと女のつらさがわかってきたね！今日、奢るよ」
と言った。
彼女は肉系の女だった。
　でてきた肉団子定食を豪快かつおいしそうにほおばる李琴に、
風は思わず
「〝スタイルは女の命〟じゃないのかね…。」
とつぶやく。
すかさず李琴が
「バカ言わないでよ！」
と、風の頭を叩く。
「あたしの命はね、子供、家族、健康なの！」

２０分と経たずに、
「う～ん、うまかった！」
風は食べ終わり、
２人分の伝票を手に取った。
　李琴は慌てて、
「もう行く気？！もっと何か食べれば？！」
と、止める。
「いや、いいよ。お腹いっぱいだし。」
風は腰をあげた。
「もうちょっと付き合ってよ～。話があるんだから。」
李琴は風の袖を引っ張り、座るように促すが、
「お腹いっぱいなんだもん。」
と、風はわざと素っ気ない。
李琴は風の手から伝票を奪い取って、
「じゃあ水でも飲んでてよ。ここは私がおごるって言ったでしょ！」

と、更に頼み込む。
「おごり？本気なの？」
「うん」
李琴は二個肉団子を口に入れた。
「それなら…」
風はやっと座り直すと、
手をあげてホールさんを呼んだ。
「肉団子定食。ご飯大盛りで。」
「お腹いっぱい、なんじゃないの？」
李琴があきれて聞くと、
風は
「君がおごってくれるんなら、無理してでも食わなきゃな。」
と、片目をつぶって笑った。
李琴は姉のような存在なので、
風は彼女に対してはいつもこんな調子で振る舞うのだ。

「それで、話って、何？」
目の前で湯気をたてる肉団子定食に箸をつけながら、
風が切り出した。
「風、社長のことどう思う？」
李琴は水のグラスを手に、
逆に聞いてくる。
すると風は、
おどけて胸を親指でさすと、
「俺はバカだけど、人を使うのは上手いんだぜ。」
と、社長の口癖をそっくりに真似てみせた。
社長は何時も漢の高祖（劉邦）に喩えるからだ。
「ププーッ！！」
李琴は思わず口中の水を吹き出した。
「おいおい、もうちょっと女らしくしろよ。」

風がおしぼりを渡しながら言うと、
李琴は顔を赤くして
「あんたのせいじゃないの！」
と、こぼした水を拭きながら、続けた。
「最近、噂を聞いてない？」
「噂なんかにかまけてる程、暇じゃないからなぁ。」
「またそんな言い方して！あたしが暇人だって言いたいの？」
李琴がプリプリしながら言う。
「ごめんごめん、そういう意味じゃない。教えて」
「もういい！」
「本当に知り。教えて、お願い！」
李琴はもう、
というように肩を落とすと、真面目な顔になった。
「新しく来る副社長のことよ。」
「あぁ…　。今度そんな人が来るって話は聞いたけど？」
李琴は一つうなずいて、
声をひそめた。
「風、ただの噂かもね」
「教えて」
「風、あまり気にしないでね」
「うん。教えて」
「彼女は今年の業界の天馬賞を狙っているのよ。」
「それで、僕と関係がある！？」
「彼女、『家族の絆』の責任者の座に収まっておきたいらしい。」
「なるほど。」
風もようやく納得した。
「でもね、風は第一弾と第二弾に成功させたから…」
「ありがとう！姉ちゃん、もういいの！」
「風…」
「僕、大丈夫よ」

風は黙って定食を食べ始めた。

１０分後、
風は食べ終わった定食のトレーをテーブルの端に押しやりながら、
「疲れたね！人生」
と、嘆いた。
李琴は
「疲れたってどういうことの？」
と、聞くが、
風は答えず立ち上がって、
「譲ってあげるかも」
「ご馳走様！おいしかったよ！」
そう言うと、
再び伝票をとってレジに向かう。
「ねぇちょっと風！本気に言っているの！？」
李琴は思わず風の背に大声で呼びかけていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8428b/

幻の物語

2010年11月2日02時22分発行